

山陰の「小さな文化」を楽しむ

# ひだまりのおと

第7号 2025

特集：「つどう」



亀尾神能（松江市）

本誌『ひだまりのおと』は、島根県立大学短期大学部文化情報学科の授業「文化情報誌制作」の成果物です。  
特集ワードからそれぞれの発想で取材先を決め、写真撮影、記事執筆、誌面レイアウトまで、学生が行っています。

## 目次

### 巻頭（寄稿）

集うことで生まれる、言葉と文化 浪花亭 福助（落語愛好家） 1

### 特集「つどう」

集えばケルトの風が吹く —キョール・アガス・クラック—（松江市） 2

みんなから愛されるまちに まちの駅女虎（松江市東出雲町） 10

亀尾神能がつくる「つどう」場（松江市） 14

物語と人が「つどう」町（鳥取県岩美町） 20

【つどい】やすく、住みやすく ～SANIN ふらっと～（松江市） 24

ツリーハウスづくりから見えた「集う」ということ（松江市） 34

人と人がつながる場所（松江市） 40

つどった場所を語る（松江市） 44

### 編集後記（裏表紙裏）

表紙題字 篠村優花（総合文化学科卒業生）

# 集うことで生まれる、言葉と文化 浪花亭 福助（落語愛好家）

この春から夏にかけて、私は「日本の言語と文化Ⅰ」という授業で、山村仁朗教授の指導のもと、24名の学生とともに「落語台本の創作」に取り組んだ。授業の目的は、単に日本語表現の技法を学ぶことにとどまらず、人が言葉を媒介としてどのようにつながり、そこから文化がどのように生まれていくのかを体験的に理解することに置かれていた。落語という題材は、その目的を鮮やかに体现する絶好の素材ではないかと思う。

落語は、一人の噺家が複数の登場人物

を演じ分け、聴き手の想像力の中に場面を立ち上げていく芸能である。語りの技量、リズム、声色、表情といった要素ももちろん重要だが、それだけで落語が成立するわけではない。客席にいる人々が同じ空間に集い、言葉を共有し、笑いを交わすことによって初めて落語は「生きた芸能」になる。語り手が放つ言葉と、聴き手が受け取る反応。その微妙な往復のなかに温度が生まれ、その温度こそが

語台本を創作した。初めは「本当に書けるのだろうか」という不安を漏らす学生も多かった。しかし、アイデアを持ち寄り、思いつきを語り合い、ときに笑いながらセリフを声に出してみるうちに、学生たちの表情はみるみる変わっていった。家族のすれ違いをテーマにした作品、誤解と早合点が重なって思わぬ展開を迎える噺、出雲弁の響きを活かした温かみのある作品など、どの台本にもそれぞれの生活の息遣いや、人間に対する優しいまなざしを感じられた。

こうした変化を目の前で見ていると、言葉は個人の中で完結するものではなく、誰かに向かつて発せられることで初めて熱を帯びるのだと実感させられた。誰かの語りに別の誰かが応じ、その反応が再び語り手を刺激する。教室の空気がゆっくりと温まっていくように、集まることで言葉に熱が宿り、その熱がさらに人を惹きつけていく?? そんな循環が確かにそこで起こっていた。

落語という文化を支える根幹だと感じている。

創作の過程では、学生同士が互いに原稿を読み合い、感想や改善点を率直に伝え合った。「この言い回しだと少し硬いかもしれない」「ここに短い沈黙を入れると笑いが生まれそうだ」など、細かい意見交換が繰り返されるたびに、作品は少しずつ磨かれ、姿を変えていった。私はその光景を見ながら、人が集まる場に

こそ言葉が鍛えられる環境があり、そして言葉を磨く営みの積み重ねが文化として結晶していくのだと改めて思った。

落語には、「間(ま)」という独特の技法がある。これは単なる沈黙ではなく、次の言葉を受け止めるための「余白」であり、聴き手の想像を広げるための「呼吸」でもある。言葉と言葉のあいだに生まれる静けさが、かえって物語を豊かにし、笑いの伏線となる。人が集う場所にも、実は同じような「間」が存在する。

誰かが語り、別の誰かが耳を傾け、思いを巡らせ、それにまた語り手が応じる。その静かな循環のなかで、理解と共感が深まり、コミュニケーションが形づくられていく。学生たちが互いの言葉に真摯に耳を傾け、真つすぐな意見を交わしていた姿には、この豊かな「間」が確かに息づいていた。

文化とは、特定の場所や制度によってのみ生まれるものではなく、人が集い、言葉を交わす場そのものから自然に立ち上がってくるものではないかと思う。日々の会話、ささやかな笑い、思いがけない誤解、共有される沈黙?? そうした小さな積み重ねがいつしか物語となり、伝統となり、やがて社会の知恵として受け継がれていく。落語はまさに、そうした人々の暮らしの中から磨かれ、伝えられてきた文化の結晶だ。

授業の終わりは、学生たちが創作した落語を一グループずつ披露した。会場には柔らかな笑いが広がり、語り手と聴き手の呼吸が自然に合わさっていくのがわかった。その笑いは、単なるおもしろさに対する反応ではなく、「わかる」「そうしたことあるよね」という共感に支えられたものだった。まさに、人が集い、同じ時間を共有することでしか生まれない喜びであり、言葉が持つ豊かな力そのものだった。

コロナ禍を経て、オンラインでのやり取りが生活の一部として定着した今だからこそ、直接会い、同じ空間で言葉を交わすことの価値を、改めて見つめ直す必要があるのではないだろうか。効率だけでは測れない対話の深さ、沈黙を共有する豊かさ、表情の変化から読み取れる感情の機微?? それらは人と人が集うときにこそ得られるものであり、文化の源泉であると思う。

落語の世界には「人がいてこそ、噺は生きる」という言葉がある。これは、文化そのものに通じる深い真理だと言えるだろう。どうか皆さんも、人と集い、言葉を交わし、互いに磨き合いながら、自分自身の物語を紡いでいってほしい。集うことの中にこそ、人が文化をつくり、文化が人を育てるダイナミックな営みが息づいているのだから。





秋も日増しに深まって来た頃、  
松江に活動拠点を置くキョール・アガス・クラック  
(以下キョール) という団体へ取材に行きました。

ここではさまざまなアイルランド楽器  
を持ち寄って、アイリッシュ音楽を演奏しています。

ティンホイッスル・パウロン・  
スプーンズ・アイリッシュハーブ…。

これらの楽器をご存じでしょうか。

いずれもアイルランドの楽器なのですが、  
一般的にオーケストラで使われるような楽器に比べると、  
あまり知られていないように思います。

今回キョールメンバーである金乗典子さん・  
福頼総子さんにお会いし、アイリッシュ音楽との出会いや、  
その魅力についてお話を伺いました。

— 近藤美里花 —

## 集えばケルトの風が吹く

—キョール・アガス・クラック— (松江市)

1994年、山陰日本アイルランド大使を務めていたジェームズ・シャーキー氏の支援により、「山陰アイルランド協会」が設立しました。

その後、2007年には松江で初めてとなるお祭り「セント・パトリックス・パレード in Matsue」が開催され、協会メンバーは演奏チームとして出演しました。パレード当日までの期間には、少人数ながらティンホイッスルの定期練習会を行っており、講師を務めていたのは松江市のALTマリー・マツギルさんという方でした。当時、演奏活動を行う際には、講師の名にちなみ「マリーズ・バンド」と名乗っていたそうです。その後2008年にブレンダン・スキャネル駐日アイルランド大使が来日した際、より相応しいバンド名がないかと相談したところ、アイルランドの公用語、ゲール語で「音楽と楽しみ」を意味する、キョール・アガス・クラックと名付けていただいたそうです。



「アイリッシュ音楽に関わるようになったきっかけ」

・金乗さん：アイルランドの曲をよく聴くようになったきっかけは映画「タイタニック」かな。それと友人からアイルランドのお土産で、アイルランドの楽器をもらったの。それで本格的にアイルランド音楽を始めようと思い、山陰アイルランド協会にお電話しました。そこから10年くらいキョールを続けているかな。

・福頼さん：1990年代、大学生だった頃、私はアメリカのレコード会社ウィンダム・ヒルのCDをきっかけに、ナイトノイズというバンドを知ったんだよね。いま一般的に言われるアイリッシュ音楽そのものではなく、ジャズやフュージョンにケルト的な音楽性を取り入れたバンドだったね。当時、日本のポピュラー音楽やクラシック音楽では飽き足らず、より自分の感性に合った音楽を探してい

たところ、ナイトノイズはアイルランドというキーワードを与えてくれたと思う。

その後、東京のCDショップでアイルランドの有名バンド、チーフスタンズのアイリッシュ・イヴニングをジャケ買いし、そこからアイルランドの伝統音楽のリスナーになりました。そして1995年、結婚を機に松江へ移り住んだんだ。ちょうどその頃、旧一畑百貨店で開催されていたアイルランド・フェアのイベントで、守安功さんと雅子さん夫妻（アイルランド伝統音楽演奏者の創始者）の演奏を間近で聴く機会があり「日本でもアイルランド音楽ができるんだ！」と感動し、その日家に帰ってから洗面器をすりこぎで叩いて、パウロン（アイルランドのフレイムドラム）のまねごとをしたの。そんな私を見かねた主人が、誕生日にティンホイッスルをプレゼントしてくれて、それ以降ティンホイッスルを演奏するようになったというわけです。

アイルランド協会に入会したのは、ケルト文化などの講座に参加するためです。そして2007年の「第1回セント・パトリックス・デー・パレード」には家族と一緒に参加し、そこで小泉凡先生と初めてお会いしました。パレードに参加するためにティンホイッスル講習会に参加し、その後は演奏活動にも参加するよ



インタビューの様子  
金乗典子さん（左） 福頼総子さん（右）



MIZ でのセッションの様子

うになり、現在に至るよ。ティンホイッスル歴は約30年、キョールでの演奏活動は17年続けています。



アイリッシュハープ



・筆者：私も大学のティンホイッスルサークルに身を置き、アイリッシュ音楽を演奏しています。このサークルに入部したきっかけは、高校時代の英語の授業でした。地図を作るため、国際交流を行っている団体やイベントを探していた頃、毎年3月9日に松江で行われているアイランドのお祭り、アイリッシュ・フェスティバルの存在を知りました。

その後、大学に入学し、このお祭りに参加できるサークルがあると知り、興味を惹かれて入部しました。音楽経験がほとんど無かった私は、最初は続けられるか不安がありました。今ではアイリッシュ音楽を演奏したり、サークルでイベントに参加したりすることが、日々の息抜きやモチベーションとなっており、無くてはならない存在です。



サークルメンバーうち4名



### アイリッシュ音楽の魅力

・金乗さん：日常の一部かな、楽しいこととの側にあるものです。アイリッシュ音楽は父が聞いていたりして、子供の頃から聴いていたんです。アイリッシュ音楽は海外のものだけれど、日本に元からあるもののように感じられて、親しみやすいものかな。だからアイリッシュは全部が好き。仕事終わりの楽しみだったり、人との親交を深めたりするにはとても良いものだと思います。アイリッシュ音楽は日常で聴くような音楽が好き。

・福頼さん：やっぱり人から教わるってことでしょうか。教室とかじゃなくて、人から次の人へつなげて、結果自分のものにするというのが魅力かな。SNSの動画にしても、知らない人がやっているのを見て覚えるっていうことが教わるってことだと思っていて、それは自分の中で大切にしていると思う。とにかくアイリッシュは全部好きだね。



11月23日  
境港市民交流センター みなとテラスにて、  
アイリッシュ音楽・セットダンスを披露しました。

### セットダンスとは

キョールではアイリッシュ音楽の演奏に加え、セットダンス（アイルランド発祥のダンス）も行っています。アイリッシュ音楽の演奏に合わせて踊るダンスで、複数人で組むものと、1人からできるものがあります。たとえば、8人で踊る場合、7人が踊れるメンバーであれば、1人が初心者でも7人でサポートして踊ることが出来ます。複数人で踊るときはみんなで完成させるようなダンスだと言えます。一方でステップダンスは、しっかりと練習を重ねないと踊ることがとても難しいダンスです。

シャンノースと呼ばれるダンスは、音楽に合わせて踊る自由度の高いダンスで、子供も感覚的に踊ることが出来ますが、一方では自由度が高すぎて難しく感じる人もいます。また大勢で踊ることのできるダンスは一般の方も巻き込んで楽しめるため、人数が増えるほど盛り上がりが大きくなります。

11月16日には、11月23日の境港音楽祭に向けて、セットダンスとティンホイッスルの練習会を行いました。境港音楽祭に参加する、ティンホイッスルサークルの1、2年生の6名に加え、金乗さん含む一般の方3名が参加し、にぎやかな練習会となりました。



セットダンスの説明



セットダンス練習会の様子





「境港音楽祭」でのダンス本番



ダンスには観客の方も参加し、  
終始楽しい雰囲気でした。



「自分にとってアイリッシュ音楽はどのような存在か」

・金乗さん：現在では、趣味の域の度がすぎていると思います。アイリッシュ音楽は終わりがいいから、ずっと続けるものだね。自分もこれから先ずっと続けていくんだろうなと思ってますね。

・福頼さん：アイリッシュ音楽は日常であり、とにかく弾く音楽だと思ってる。体の一部みたいなものですね。

「今後の展望・キョールや個人の活動は？」

・金乗さん：キョールは続けていくかな。でもセッションの時とかはキョールのメンバーではないけど、3月のセントパトリックのお祭りの時はキョールのメンバーとして参加しますね。キョールは人や人数が決まっていなくて、動きのあるバンドなんですよ。

・福頼さん：アイリッシュ音楽はそもそもユニゾン（同じメロディーを複数人で演奏する形式）なので、1人でも演奏できるし複数人でも演奏できる音楽ですよ。だからいわゆるバンド的な要素は少ないのでメンバー同士の関係性が流動的。キョールもそんな感じ。それに加えて今年度からアイルランド協会の活動形態が変わったため、キョールはアイルランド協会所属のバンドではなくなって、ただのアイリッシュ音楽好きの集まりになったから、メンバーの所属意識も変わっていくでしょうね。

「取材を終えて」

今回、私が所属しているティンホイッスルサークルと交流のある、キョール・アガス・クラックに取材をさせていただきました。私自身アイリッシュ音楽を演奏する中で、キョールメンバーの金乗さんや福頼さんをはじめとする、アイリッシュ音楽に関わる沢山の方との出会いがありました。アイリッシュ音楽との出会いや経緯は人それぞれ異なりますが、お話を伺っていて、身近なものとなっているという感覚は、お二人とも同じであるように思いました。また年齢、立場、ルーツの異なる人たちが、日常の時間軸から外れて同じ瞬間を共有できるという面も、アイリッシュ音楽の魅力だと感じました。

キョールやティンホイッスルサークルなど、メンバーは移り変わっていきませんが、そこでつどい、積み重ねてきた出会いや時間は一人ひとりの人生に彩りを与え、寄り添い続けてくれると思います。

（こんどう みりか）



# みんなから愛されるまちに

まちの駅女虎

(松江市)

永田友香



筆者は、地元にある松江市情報案内所東出雲まちの駅を訪ねました。そこは、松江市より管理運営の委託を受けて、NPO 法人東出雲まちの駅女寅が運営をしている施設です。



説明をしてくださる竹本さん（左）

今回、取材を受けてくださったのは竹本莉乃さんです。竹本さんは、子供の頃に電車通学しており、よくまちの駅の前を通っていたのですが、今みたいな雰囲気とは違ってここに集まっておられる方も高齢の方が多い場所でした。竹本さんが小学校の頃は、パソコンが置いてあってそれを使い友達何人かで遊びに来ると、女寅に来ておられるおじいちゃん達に「うるさい」と、怒られるちよつと怖い場所のイメージがあったそうで

す。そんなイメージを抱いていた竹本さんですが短大生の時に女寅の取材をしたのです。当時、店番をされていた方が70代くらいの女性だったのですが、その女性「自分はまちのためにやりたいことがすごく沢山あるんだけどもう自分自身も高齢だし他の従業員も高齢でやりたいことが出来ないだ」と言っておられるのを聞き、協力できることがあったらやりたいなという思いになりました。最初は別の仕事をしながら、ウェブ関係のことを月に1回程度手伝いに来る関係を約8年続けていたのですが、3年前くらいに正社員になったそうです。子供でも気軽に立ち寄れるような雰囲気のある場所になるといいなと思いながら働いているのだと話していただきました。

### 【まちの駅女寅の由来は?】

市川女寅さんという歌舞伎役者さんは掛屋駅のすぐ目の前で生まれており、明治の頃に活躍されて、性別は男性なのですが女形の役者をしていました。市川女寅時代が一番輝いていた時代でしたが、その後、市川門之助という名前を襲名されました。最後は門之助だったので「めとらはん」時代が長かったことから、当時「めとらはん、めとらはん」とすぐく愛されていた役者さんだったそうです。そこで、このまちの駅も「めとら

はん」のように愛される場所になればというところで、『まちの駅女寅』と名付けられました。掛屋駅にあるブロンズ像の顔の向きは市川女寅さんが住んでいた家の方向を向いています。



### 竹本さんのお話

#### 【年間来店人数と特徴は?】

〈年間来店人数〉

令和6年度	10190人
令和5年度	11171人

平成29年度	17926人
平成28年度	17600人

高齢の方が中心の場所だったので新型コロナウイルスが流行った時、みなさんお家から出てこられなくなって、コロナが落ち着いてからもコロナ期間に家から出る習慣が無くなったため、すぐ元に戻るわけではなく、そのままあまりお見かけしない方もほとんどかなという印象があります。

#### 〈特徴〉

これまでは圧倒的にご年配の方だったのですが、ここ数年は店内をリニューアルして雰囲気が変わってきたので中学生さんや小さい子供連れのお母さんたちが入って来られたり、電車に乗られる30代、40代、50代くらいの男性の方も電車の待ち時間に休憩されるようになっていたり、ちよつとずつ年齢層が広がっているという印象があります。

黄泉比良坂に行きたい方がすごく多くて、NHKの「ドキュメント72時間」っていう番組があるんですけど、それに取上げられて、ご覧になった方が増えてレンタサイクルされたりとか。「仕事の休みが取れなくてやっと来れました」とか、神話や古事記が好きで黄泉比良坂行ってみたいとか、ゲームとかアニメにも登場するようなので聖地巡礼みたいな

感じて来られたりとかですね。



【みんながまちの駅って?】

どんな団体が作っても良くて、場所も幹線道路沿いとかじゃなくても良くて、ここはたまたま掛屋駅の横なのですが、そうじゃなくてもいいんです。例えば、自営業されている美容院とかケーキ屋さんとか、そういうところをまちの駅に定めても大丈夫です。ただ、誰でも自由に休憩ができて、トイレが使えてみたいなところの簡単な条件はあるので、それだけちよつとクリアしないといけないんですけども。

【みんなごはんをつくらますか?】

この施設の管理運営の委託を受けているので、ほんと鍵開けてみたいな簡単なところから、掃除とか、なんでも使えるような場所にするっていうことと、あと松江市の観光施設課っていうところが



所管になるので、一応観光施設っていうくくりになるんですね。なので、例えばJRで、関西の方からとか観光の方が来られた時に荷物預かりしたりとか、レンタサイクルがあったりとか。東出雲だと黄泉比良坂っていうところに行きたいっていう方がとても多いんですね。「黄泉比良坂までどうやって行ったらいいですか」って聞かれた時にご案内したりもします。最近だったら9号線沿いにビジネスホテルができたんですけども、「あそこに泊まりたいんだけどここからどうやって行ったらいいですか」って聞かれたりとか。そういう時にお答えできるようなしておくっていうのが松江市から委託を受けている内容になります。

NPO法人が独自に取り組んでいることは、喫茶の営業などです。これも東出雲町に松浦珈琲さんって自家焙煎専門のコーヒー屋さんがあるんですけども、その豆をずっと仕入れさせても



らって、コーヒーをお出ししたりとか。手作り雑貨の販売コーナーとか、ギャラリー展示とかは、まちの駅独自の事業として取り組んでいるものになります。2週間交代で作家さんが入れ替わっていて、1回500円の利用料です。特に松江市内の人じゃないとダメですよみたいなルールはなくて、町内の方だったりとか、安来とか出雲の方の作家さんが使われることもあります。プロとかアマチュアとか全く関係ないので、たくさん自分で作ったものをお家に溜め込んでいて、どなたにも見てもらう機会なかなかないって方結構おられるんですね。そう

いった方の作品発表の場としても使ってもらえている場所になります。大体皆さんインスタとかを見られてとか直接「空いてないですか」って来られたり、喫



茶に休憩に来られる方がギャラリー展示の場所があるって知ってお友達とかに「あんた作ってるやつここで飾ってみんな？」とかつてちよつと声をかけてくださったりとか。そういうった広がりもあつたりしますね。団体さんだと東出雲公民館で水彩画をされている教室の皆さんの作品を一つずつ展示されたりしていますね。結構ジャンルも制限していませんで、絵とか写真もありますし、陶芸だったりとかいろいろです。ちよつと前は和雑貨というかつまみ細工の作品を展示されたこともありました。このクラフト

ショップの方は、1区画月5000円と6000円のブースと2つあるんですけど、利用料をいただいで、あと販売手数料20%をいただいでいますね。コロナが流行る前からずっと使っておられる作家さんもおられれば、増設したタイミンで新しく申し込みされた方も結構おられるので、ジャンルもあまり被ってないんですよ。布衣物ばかりとかレジンのアクセサリーばかりとかじゃなくて。万遍なくいろんなものを販売できていてすごありがたいなと思っています。入っ



て、色鮮やかな目を引くものがあるとそれに吸い寄せられるような感じで、買わなくてもそこにふらつと行かれるので、これはちよつと成功だなんて思っているとこです。

### 【イベントはありますか？】

イベントとしてはあんまりやっていないくて、年に数回ミニコンサートを開催しているぐらいですね。ミニコンサートは日頃まちの駅を使ってくださっている皆さんに感謝の思いを込めて開催するようなものになります。いつも1時間くらいの内容でほしい松江で音楽のグループされてる方にゲストに来ていただいて、演奏してもらってみたいな。ミニコンサートを前やっていた時は25人くらいがこの部屋にギュッと入ってくださるんですけど。高齢の方が多いです。中学生とお母さんとか親子で来られる方が1人2人くらいかなって感じます。

### おわりに

竹本さんは、島根県立大学短期大学部の卒業生で、学生時代、松江キャンパスの第1回キラキラドリウムプロジェクトに応募され、活動されたそうです。その時の、実際に自分が動いて形を作っていく経験がなければ、今のようない仕事には繋がらなかったとおっしゃいました。当

時、松江キャンパスでプロジェクトを担当されていた雪吹重之さん(現学務課長)に感謝しているとおっしゃっていました。

先輩の活躍を見て、地元に貢献する仕事の意義を感じることができました。

(ながた ゆうか)



# 亀尾神能がつくる「つどう」場 (松江市)



長島朱里

― 亀尾神能は、松江市西持田町持田神社に伝わり、江戸中期には舞われていた神楽です。亀尾地区の正月行事「歳徳神祭」の神事として継承され、後世になり、舞楽の祖神天鈿女命（あめのうずめのみこと）をご祭神として祀っている持田神社の例大祭の夜の奉納神事として受け継がれています。近年では秋祭の時期には近隣の神社からも声がかかり奉納神事として演じています。今回は亀尾神能保存会の方々に話を伺いました。



亀尾（かめお）地区で長年受け継がれてきた神能の話を聞いてみると、「意識して集まっていたわけではない」という言葉を何度も耳にしました。神能は、この地域にとって特別な行事であると同時に、日常の延長線上にある存在だったのだと感じます。

亀尾という地名の由来は明確ではなく、語り継がれた説も特に残っていないようです。それでも神能は当たり前のようにつながられてきました。

### 行事が人を集めていたころ

かつて、神能が行われる日には、特別な呼びかけがなくても人が集まっていました。農作業を通して日常的に顔を合わせ、祭りの日には自然と神社へ向かう。そこには「参加するかどうか」を選ぶ以前に、「行くのが当たり前」という空気があったといえます。近くに小学校があるので、子どもたちが放課後や祭りの日に集まり、神能を見ていました。大人に連れられて行くのではなく、生活の延長として、その場に居合わせていたのです。神能は、地域の人々が顔を合わせ、言葉を交わし、同じ時間を共有するための場として機能していました。



## 集まり方が変わってきた理由

しかし、時代の変化とともに、「つどろ」かたちは変わっていきました。仕事は農業中心から多様な職業へと分散しました。日常的に顔を合わせる機会は減り、かつてのように自然に集まることは難しくなっています。一方で、近年は持田神社のSNS発信やクラウドファンディングの影響もあ

り、遠方から参拝者や観客が訪れるようになりました。神能は、地元の人だけが集まる場から、地域外の人も引き寄せる場へと広がりを見せています。集まる人の顔ぶれは変わっても、「神能の場に人が集まる」という構図そのものは、現在も維持されている点が印象的です。



## 「声がかかれば行く」外へ開かれた集い

亀尾の神能は、他地域の神社でも舞われることがあります。その理由を尋ねると、「依頼が来るからです」という、非常にシンプルなお答えが返ってきました。祭りを盛り上げる存在として神能や神楽が求められ、声がかかれれば応える。この関係性もまた、人が集まるきっかけを生み出しています。かつては地域内のつながりが中心でしたが、現在では神社関係者や外部の協力者も加わり、ゆるやかなネットワークが形成されています。神能は、人を囲い込むのではなく、外とつながることで新しい「つどろ」を生み出しています。

## 神能を支える人たち

現在、神能を担うメンバーは31歳から76歳までと幅広い年齢層です。舞い手はおおよそ12名、囃子方として笛や太鼓を担当する人が3〜4名います。年齢や立場の異なる人々が、一つの舞台を成立させるために集まっています。練習は行事のおよそ1か月前から本格化し、舞や囃子の段取りは複雑で、完全に身につけるまでには3年ほどかかるといえます。かつては映像資料がなく、

「見て覚える」ことが当たり前でした。現在は古いビデオを参考にしながら練習が行われていますが、最終的には人と人が同じ場に集まり、動きを合わせる事が欠かせません。





「ここに生まれたらやる」という感覚

神能への参加は、強い決意から始まるものではありませんでした。「ここに生まれたらやる」という感覚が、かつてはごく自然に存在していたそうです。昭和26年に保存会が発足して以降、神能は地域の男性たちの生活の一部として受け継がれてきました。現在では、大人になってから興味を持って参加する人や、結婚して外からきた人が加わるケースも見られます。仕事との両立を考えながら続ける人が多く、集まりは以前よりも選択的なものになっています。それでも、神能の時期になると人が集まる流れは、今も保たれています。

ハプニングも、語り合う思いに出に

神能の場では、常に順調に進むわけではありません。本物の刀を使う舞で柱に刀を刺してしまったことや、幕が破れるといったハプニングも起きてきました。しかし、そうした出来事は失敗としてではなく、後に語り合われる思い出として共有されています。完



壁な舞を見せること以上に、同じ場に集まり、緊張や笑いをともに経験することが、神能という集いの価値を高めているように感じました。

### 舞台上に立つときの意識

かつては酒を飲みながら舞うこともあり、それも祭りの雰囲気の一部だったそうです。現在は飲酒する人も減り、舞に集中する姿勢がより強まっています。神能で用いられるお面は、角度によって表情が変わります。そのため、どのように見せるかを意識しながら舞う必要があります。舞台上では演者同士が視線や気配を感じ取りながら、一体となって場をつくり上げています。

### 集まりにくい時代の中で

神能の継承が難しくなっている背景には、現代社会の変化があります。農業中心の生活が減り、仕事や生活のリズムは人それぞれ異なるようになりました。若い世代ほど忙しく、集まりたくても集まらない状況が生まれています。また、かつてのような酒席を通じた濃密な地域の付き合いも減少し、「集まること」自体が意識的な行為になりつつあります。





それでも続く「つどろ」場

おわりに

現在のメンバー12名は、地域全体というよりも、神能のために集まる専用の集団に近づいています。その一方で、O Bが行事の時期に戻ってきたり、神社関係者や外部の協力者が加わったりと、集まり方は多様化しています。これは、「つどろ」ことが消えたのではなく、形を変えたことを意味していると感じました。日常的に集まらなくなっても、節目には集まる。そのゆるやかさが、現代における神能の現実的な姿なのでしょう。

### 「毎年同じ」がつくる時間

取材の中で、「毎年同じ行事が続くと自体に地域の意味がある」という言葉を聞きました。関係者の多くが、この考えに強く共感しているそうです。神能は、新しいことを次々と取り入れることで人を集めているわけではありません。年に一度、同じ舞が演じられます。その繰り返しの中で、人は再び集い、顔を合わせ、地域との関係を更新していきます。

亀尾の神能を通して見えてきたのは、「つどろ」ことが失われたのではなく、時代に合わせて形を変えながら今も続いているという事実です。かつてのように日常的に顔を合わせる関係は減りましたが、年に一度、同じ舞が演じられることで、人々は再び集い、地域とのつながりを更新しています。そこでは、完成度の高さ以上に、同じ時間と場を共有することそのものに価値が置かれているように感じられました。毎年変わらず行われる神能は、人と人を静かに結び直す役割を果たしています。亀尾の神能は、現代における「つどろ」場のあり方を問いかけながら、これからも地域とともに受け継がれていくと考えます。

(ながしま あかり)



# 物語と人が「つどう」町（岩美町）

飯塚真子

記事内の「Free！」については以下から引用

「Free！」：2013年 おおじこうじ・京都アニメーション / 岩鷲高校水泳部

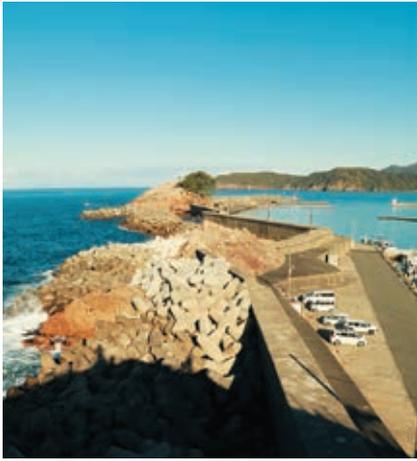
岩美町観光協会

## 岩美町 × 「Free!」

9月23日、11月22日に出雲から車で片道3時間半の道を経て鳥取県岩美町を訪れました。

岩美町とは、鳥取県の最東端に位置しており、海と山と温泉をまるごと味わうことができる町です。

海ではサーフィンやシュノーケリング、遊覧船など様々な方法で楽しむことができます。その中でも浦富海岸は山陰海岸ジオパークの一部になっており、この地の魅力の一つとなっています。また、山には棚田や窯元があり、平安初期から続くといわれている岩井温泉で癒されることもできます。そんな穏やかな海と山に囲まれた岩美町。実はこの町、ある有名なアニメ作品のロケ参考地として注目を集めています。その作品が、「Free!」です。



「Free!」とは、2013年7月より放送されていたテレビアニメです。競泳をテーマに男子高校生の青春を描いています。京都アニメーションが制作しており、今でも高い人気を誇っています。そして、「Free!」が放送開始された2013年に1万人弱だった岩美町の観光客数は、翌年の2014年には3万人に、2015年には6万人へと大幅に増加しました。



▶アニメ「Free!」公式ホームページから引用

### 「Free!」を活かした取り組み

地元では、岩美町観光協会の方が主にイベントなどを主催しておられます。今回、岩美町を訪れたこの日、観光客だけでなく岩美町観光協会の田中司さんにお話を伺いました。田中さんからは、「地域を支えるのはその地域ではたらく人で、僕自身も働かなきゃいけないと思っただけです。観光が良くなることで地域が良くなると思ったんです。」というお話をいただきました。

さまざまな取り組みを行ううえで工夫をされているのは、実際の風景を見て回ることで、季節問わずいつでも来ていただくことを目指していることだそうです。その一つがレンタルサイクルです。車と比べ風景を楽しむ時間を増やすことで岩美町の空気を肌で感じることができそうです。

町では今、「Free!」の登場人物が描かれたラッピングバスやスタンプラリー、登場人物の誕生日飾りつけなどが行われています。



11月17日誕生日  
橘真琴の誕生日飾り▶

多くのファンが駆けつけメッセージを残しています

といった「Free!」に沿った内容もあります。

そのほかにもアニメ10周年を記念して2025年5月に大きなイベントも開催されました。キャストやスタッフのトークショー、このイベントでしか手に入らないグッズの販売、ロケ参考地の周遊バスツアーなど内容は盛りだくさんでした。このイベントのために飛行機の機体を変えたり、公共交通機関も増便したりと、来ていただくお客様が安心、安全に楽しんでもらえるよう心掛けていたそうです。

地域の取り組みについてお話を伺う中で町がロケ参考地として盛り上がり始めたころ、地元の方から「私たちに話がないんだけど」といった声が多く聞かれ、小さな摩擦が生まれることもあったそうです。しかし、今では理解していただける方も増え、積極的に町全体で取り組みたいという考えのもと様々なおもてなしを行っておられます。

## 岩美町を歩く

岩美町探訪では「Free!」に登場したロケ参考地を中心に散策していきました。

最初は道の駅「きなんせ岩美」を訪れ

ました。ここはロケ参考地ではありませんが長距離移動の休憩や岩美町を知るために訪れる場所として最適です。店内では地元の魚介や野菜、焼き物などが売られています。奥に進むとアニメグッズが販売されており「Free!」関連のものも置いてありました。また、観光客を歓迎するような登場人物たちのアナウンスも流れ、改めてロケ参考地に來たと実感しました。

その後、有名なロケ参考地として岩美駅、荒砂神社、田後神社、田後展望台に行ってみました。

岩美駅の駅舎は少しレトロで赤い屋根が特徴的です。バス停があるのでタイミングがよければ「Free!」のラッピングバスも同時に見ることができるとも思いません。すぐそばに岩美町観光協会があり、レンタサイクルや町のマップなどを入手することができます。



第一期 九話から引用



第一期 七話から引用



次に荒砂神社を訪れました。荒砂神社は、浦富海岸に隣接する神社で、大きな岩場の上に建立されています。鳥居をくぐって少し急な階段を上がると本殿を参拝することができます。また、海の岩場には赤い鳥居が建っており、そこにも小さな神社があります。鳥居の赤と海や空の青のコントラストがとても綺麗です。

田後神社は「Free!」のロケ参考地の中できるとくに重要な場所です。というのも、主人公の家のモデルとなった場所がすぐそばにあり、何度もアニメのワンシーンとして登場しているからです。実際に建物はありませんが、アニメのシーンと同じ場所に立つことで登場人物達が見ていた景色を実際に見ることができます。

田後神社は「Free!」のロケ参考地の中できるとくに重要な場所です。というのも、主人公の家のモデルとなった場所がすぐそばにあり、何度もアニメのワンシーンとして登場しているからです。実際に建物はありませんが、アニメのシーンと同じ場所に立つことで登場人物達が見ていた景色を実際に見ることができます。



第一期 一話から引用

田後神社とつながっている田後展望台は浦富海岸沿いにある小さな展望スポットです。高台に位置しているため、海や漁港、漁村が一望できます。落ち着いた雰囲気な場所なので居心地がとても良く、風景を眺めながらゆったりするのに最適でした。



第一期 一話から引用

## ファンとのつながり

町にはファンの方との距離感が近く、主人公の好物であるサバが食事として提供されるアニメプランでの宿泊も可能な「ビーチインたけそう」という民宿があ



「れすとはうすロマン」



「ビーチインたけそう」

第一期 五話から引用▲

そうした中で、ファンの支えによって守られてきた場所もあります。それは田後の展望台です。田後の展望台へと続く道には手すりがありますが、時間とともに傷んでしまい危険な状態でした。高台なため、歩くには必要な手すりを直すためにクラウドファンディングを行い、手すりを新しくしようと考えたそうです。結果、ファンの方々のおかげで目標金額に達し、今では状態が改善し安全に歩くことができています。

他にも田後の漁村の建物を老朽化のため外観をできるだけ保ちつつ改装し、ファンの方々へ向けた宿泊施設とし、残していいこうという取り組みもみられました。

ります。また、ケチャップでキャラクターの名前を書いてくれる「れすとはうすロマン」という場所もあり、ファンを受け入れてくれる様々な施設が見られます。しかも、どちらともロケ参考地としてアニメの中で描かれており、アニメも岩美町も両方楽しめる場所になっています。一方、ロケ参考地としての岩美町の風景の維持は難しく、実際に無くなってしまう場所もあります。しかし、観光協会の方も、変化していくことは気にしておられず、無理だったら無理と割り切っておられました。

このように、ファンの方々を支えられながら岩美町の大切な場所を維持してられます。

## これからの岩美町

観光協会の方は、「Free!」の状況がいつまで続くかわかんないっていうのもあって別の柱を作らいたいけない。」とこれからの岩美町について思いを話してくださいました。

そのうえで、これまで大切にしてきた「Free!」の取組を続けながら、海をはじめとした岩美町が本来持っている可能性を広げていきたいという前向きな気持ちも語られていました。

## 終わりに

岩美町では、「Free!」という作品をきっかけに人が集い、地域の人々の努力によって町が少しずつ変化しています。これから先、岩美町がどのようなかたちに変わっていくのか、「Free!」とどう歩んでいくのか。また自分の足で確かめに行きたいと思いました。

是非、皆さんも訪れて周囲に配慮しながら「Free!」と岩美町両方の魅力を感じてみてください！

(いつか まこ)



# 【つどい】 やすく、住みやすく

～ SANIN ふらっと～（松江市）



進学や就職を機に地元を離れる若者は少なくありません。

一方で、さまざまな理由から再び故郷へ戻ってくるUターン者もいます。「家庭の事情」「生活コストを抑えたい」「生まれ育った土地で働きたい」など、その背景は人によって様々です。

しかし、すべての人にとって地元が暮らしやすい環境であるとは限りません。

今回は、Uターンの経験や地域コミュニティでの活動を通して、山陰で暮らす若者に寄り添った支援やサービスを行っているSANINふらっとの宮崎航平さんにお話を伺いました。

近藤美里花

SANINふらっとは、宮崎さんの勤める株式会社graphicsという会社が行っているサービスの一つです。2025年3月1日に創設され、現在まで幅広く活動しています。

宮崎さんは、SANINふらっとについて「若者と街をつなぐ地域活性化エージェント」と呼び、地域にとっては縁の下の力持ちのようなものかもしれない」とおっしゃっていました。SANINふらっとの活動形態としては、SANINふらっとの社員が表立って何かをするというよりは、企業や飲食店など誰かをたてあげられるように、サポートできる状態をつくるといった体裁でやっておられるようでした。



宮崎航平さん

### SANINふらっとを立ち上げたきっかけ

宮崎航平さんは島根県出雲市の出身で、進学を機に県外の大学へと進みました。大学時代は、授業のほかにコミュニティづくりの活動を行ったり、飲食店での手伝いや自主的な仕事に挑戦したりと、さまざまな取り組みをされていたそうです。

卒業後は地元・出雲へUターン、しかし、暮らし始めてすぐに「この地域でこの先ずっと生活していくのか」と感じました。島根県には若者が気軽に集まったり、新しい出会いや活動が生まれたりする場所は決して多くないと考えていました。宮崎さん自身、コミュニティを作るのは得意ではなく、地域で事業を始めるのも簡単ではありませんでしたが、それでも、「若者が集まる機会」や「地域の飲食店や宿泊施設などにもプラスになる動きを作りたい」と考えたそうです。そんな時、その想いを後押ししたのが、若者を中心にイベントを企画していた源（みなもと）さんの存在でした。源さんは、山陰で若者が集まることのできるイベントや、遊び場づくりに取り組んでいました。それは決してお金のための活動ではなく、ただ、地域に必要な場を生み出し続けたいという純粹な想いからでしたが、想いだけでは継続できませんでした。そこで、源さんが遊び場づ

くりや、関係性構築の場づくりなどを続けるための資金集めを維持できるよう、宮崎さんたちがサポートする形ではじまったのがSANINふらっとでした。



インタビューの様子 筆者（右）

**提携という形で会社を始められたきっかけ**

宮崎さん：「そもそもこういったコミュニティ活動や、イベント系などの「若者集まれ」というようなものは、公的機関が補助金を使って、若い人に情報を届けたり、若い人へのきっかけづくり、挑戦環境づくり、移住定住関係への関係性をつくるというところを行う場合がとても多いです」

もともと「教育無料化プラットフォーム」という団体に所属していた宮崎さんは、そこで、県外に出た島根県出身の学生たちが、島根県を出ている4年間の間に島根県にUターンする際に、関係性維持ができていよう支援する担当を任されていました。この取り組みは、島根県と共同で行っていたそうです。



**この取り組みを行っている際に、「行政のやりたいこと」「SANINふらっとのやりたいこと」「学生がやりたいこと」が若干ずれるということが起きたそうです。学生は何かやりたいという思いがあっても、補助金(住民の税金)を使って活動できるか、という問題がありました。そしてこういう場合は、できないという結果がほとんどであったそうです。**

「こういった時に、人を集める機能や人が集まる場というのは民間企業の一取り組みとして実施して、行政はもっと違うところにお金を使ってくれればよいのでは」と宮崎さんは考えたそうです。

**お金を落とす仕組みをつくる**

SANINふらっとのターゲットは主に山陰の若者です。若者から直接イベント費用をもらうということは難しくありません。しかし、事業としてはあまり成り立たないのが現状です。では、若者が接続されることで、喜ぶのはどのような対象や企業かと考えた時、宿や飲食店、民間企業などの、「若者の力が借りたい」という方たちがその対象になります。例えば、SNSの運用やイベント企画などをやってくれる若者を求めていることを想定しているそうです。



社員のみなさん



SANIN ふらっと事務所内



宮崎さん：「SANINふらつとは若者に対して、色々な機会を提供したいんですね。しかし、若者からお金をもらい続けるのはしんどい。若者がいて喜ぶ人たちのサポートに自分たちが関わること、価値交換というようないことが出来る」と、この取り組みは続くんじゃないか。「自分たちが一番よく使うのが飲食店などだったので、飲食店さんに情報発信のお手伝いをし、イベントや飲み会などで直接若者を飲食店とつなぐことで、飲食店さんにお金をもらおう。という取り組みが出来ないかと考えています。そこで飲食店さんなどにアプローチをかけていきましたね。」

### 提携企業はどのくらいの数があるのか

SANINふらつとが本格的に始まったのは2025年4月からでした。現在関わりを持っている飲食店・娯楽施設・宿泊施設は30〜40社ほどであり、協力関係にあります。

### 現在至るまでの経緯

(立ち上げるまでの苦労・立ち上げてからの苦労)

宮崎さん：「これは本当に『SANINふらつとってなに？』というところの定義を決めるのがとても難しいということです。これは立ち上げる前も、今も同じ



なんです。結局自分たちって何者なのかと自己紹介をする時に、SANINふらつとって若い人のコミュニティですって自己紹介するのか、飲食店の色々なお手伝いをしてる団体ですとするのか。自分たちが結局何者なのかっていうのが上手く定義できてない。

あとは、自分たちがやっていることは人が動いてなんぼなことをしているの、人に依存しすぎるといふか、イベントをやっても集まらない時も全然ありますし、集まるときは異常に集まりますし、やっぱり人と人なので何か問題が起こることもあるんですね。そういう時に、SANINふらつとっていう中で何か問題が起こったら自分たちが責任を取らなければいけないし、こういう人ありきの取り組んでいる難しさはあるかなと思います。」

## SANINふらっとの魅力

宮崎さん：「ネガティブよりの視点になると思うのですが、島根県は娯楽が少ないので、イベントをすれば人が集まると思っています。しかし企画をする人がいない。そこで自分たちが企画者になることで、集まってくれる人が一定数います。企画をしたいという人がSANINふらっとという名前を借りてやっていたりもするので、SANINふらっとを上手く使ってくださいと思っています。先週SANINふらっとでイベント的に夜カフェをした時には、40人くらい来てくれた。その時はほとんど社会人だったけど学生もよくいます。」

## 県立大学との関り

過去には飲食店や地域の事業所とコラボする取り組みとして、県大近くにある日乃屋カレーさんが参加していたそうです。県大前に店を置くと県大生が来てくれるのではと見込んでいたそうですが、実際に県大生の利用はそこまで多くなかったそうです。ここでSANINふらっとが取り組んだことは、県大の学友会に協力してもらいチラシを配ったことでした。そのチラシについているQRコードを読み取ると、日乃屋カレーのクーポンが使えるという仕組みを作ったそうです。この仕組みはSANINふらっとの関わるどの店舗でも導入されている仕組みだそうです。



日乃屋カレーで県大向けの交流会を企画し、島大生と県大生合わせて20〜30人くらいが参加し、カレーを食べながらボードゲームしたそうです。小さなイベントではありましたが、日乃屋カレーさんにとっては、そもそのイベントのノウハウや大学生へのアプローチの方法が分からないということもあるそうなので、SANINふらっとはその点をカバーするようなサポートが出来ていたと思います。



県大生とのイベントの様子



SANIN ふらっとイベントチラシ

また、おむすび三休さんというお店と  
共同で、おむすびの新商品、新メニュー  
開発をワークショップで行うなど、若者  
だけでなく、さまざまな人に告知を行  
い、メニューの案を募りました。実際  
にメニューが決まり10月くらいからS A N  
I Nふらつとが考えた新メニュー「島根  
和牛ビビンバおにぎり」がおむすび三休  
さんで販売されていたそうです。

沢山の応募があり、その中から予選通  
過したアイデアを4つ選び、その4つを  
みんなで食べ比べて、投票して決めま  
しょうという風に決定したそうです。

「Sパーク」というイタリア料理屋さ  
んと一緒に、ワイン会のような企画をし、  
ワインを全く知らない若者たちとワイン  
を飲みましょうというような企画も行っ  
ており、現在はそのような企画を細かく  
細々とやられているそうです。

また、飲食店さんの企画会議に参加さ  
せてもらったりもしているそうです。



おむすび案の審査会に進まれた皆さん

11月15日、筆者はSANINふらっとが主催するイベントに参加しました。場所は、島根県松江市島根町のマリノパーク多古鼻というところで、60人近くの参加者がありました。

イベントの内容としては、チームに分かれて自由にカレーを作り、優勝したチームは賞金を獲得できるというものでした。ロツジをまわり、各チームのカレーを見せていただきました。夏野菜カレーや王道のカレー、バターをテンパリングするところから始めている本格派のチームもありました。

優勝チームが発表される時間、筆者はすでにマリノパークを離れており、結果はわかりませんでした。



カレー大会前のモルック大会



外の調理スペース



お米を炊く火を起こしている様子





## 現在の課題・展望

宮崎さん：「以前とは少し方向性を変えています。S A N I N ぷらつとを純粹にコミュニティ活動として終わらせるのか、事業的な視点で変えていくのか、ずっといま考えながらやっています。S A N I N ぷらつとはコミュニティの名前ではあるものの、概念のような感じなので、若い人たちが集まる場をつくるのか、若い人たちの挑戦の機会をつくるのかそういうところは変わっていないんですが、僕が大阪時代に飲食店向けにいろいろ仕事をしていたり、インターンで飲食店のウェブマーケティングを会社に入ってやっていたりもしたので、山陰の飲食店さんや温泉、サウナ、アパレルなど、僕らみたいな年代の人を対象に、事業を作れないかなと。自分たちがいることでいろんな情報がどんどん回っていくような、そんな雰囲気づくりが出来ないかなといま企画をしています。もともとこういうことを通して自分たちがやりたいこととして、この街面白くなって生活しつづけてもらおう状況をいかにつくれるかみたいなのはあります。そのためには、例えば僕が全部ひとりで企画をして、全部ひとりで集客してすべてを任せましたみたいなのでは、限界があるので。企業でもイベントでも良いですし、雑誌をつくるでも良いし、なんかやりた

いなという人たちがいた時に、その人たちが少しでもやりやすくなるような環境や、お手伝いを、自分たちがこれまでやってきたようなことを活かしつつ、やっていきたいなど。それで企画者が沢山増えることで、街にイベントが沢山増えるだとか企画みたいなだとかが沢山増えること、自然と街が盛り上がるよねと。若い人たちと話をすると、『ラウンドワン欲しいな』とか、でもそれは現実的ではないですね、でもラウンドワンつくらないでもボーリング大会があつて、スポーツ大会があつてみたいに、いろんなところで企画が起こっているという状況があれば、遊べるところは全然あるよねという状況になるので。そういった状況をどれくらいお金をかけずにできるかみたいな、そういった企画のかきつけかなどを沢山増やしたい。という感じで今考えています。」

「もう一つは、いま企画をしているのが、例えばコマダ珈琲行くなってしまった時に、行ってみたらすごく並んでいますとか、空いていないこととしてあるじゃないですか。そういうのって事前に分かれば、とても楽じゃないですか、飲食店さんとかの空き状況がマップ上で一目でわかるので、そういった情報マップみたいなのがつくれば生活が楽になる人が沢山いるんじゃないかなと思って。また、デジタ

ルサイネージって最近増えたじゃないですか。伊勢宮や東本町っていう飲み屋街にああいうのを置いて、そこに行くとか業さんなどの情報が分かったり、今どこが空いているのかが分かるみたいな街の情報発信場みたいな物をつくって、観光客や島根県を知らない人などに、『ここ今空いてるよ』と教えてあげられるような、デジタルツールがあると、飲食店さんたちも普段アプリでできない層にアプローチできる。またユーザーも空いているか空いていないかというちよつとしためんどくささというのが、解消できると思うので、いまそのようなものを企画してつくりたいと思っています。」





KARLY 松江 (テナント)

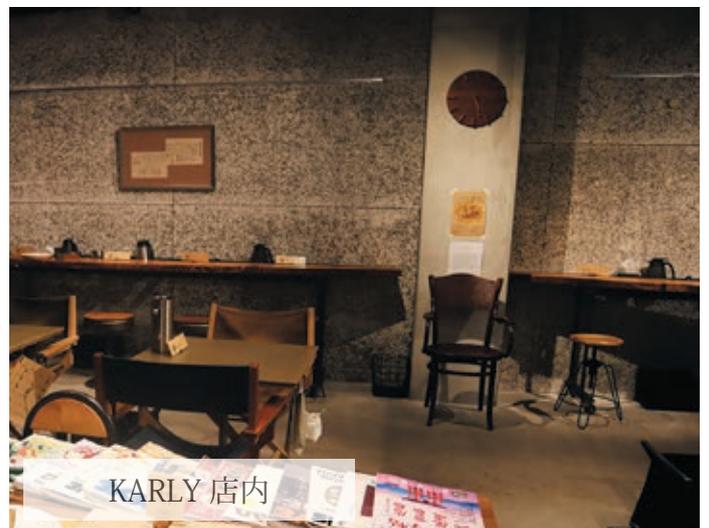


ポークカレー

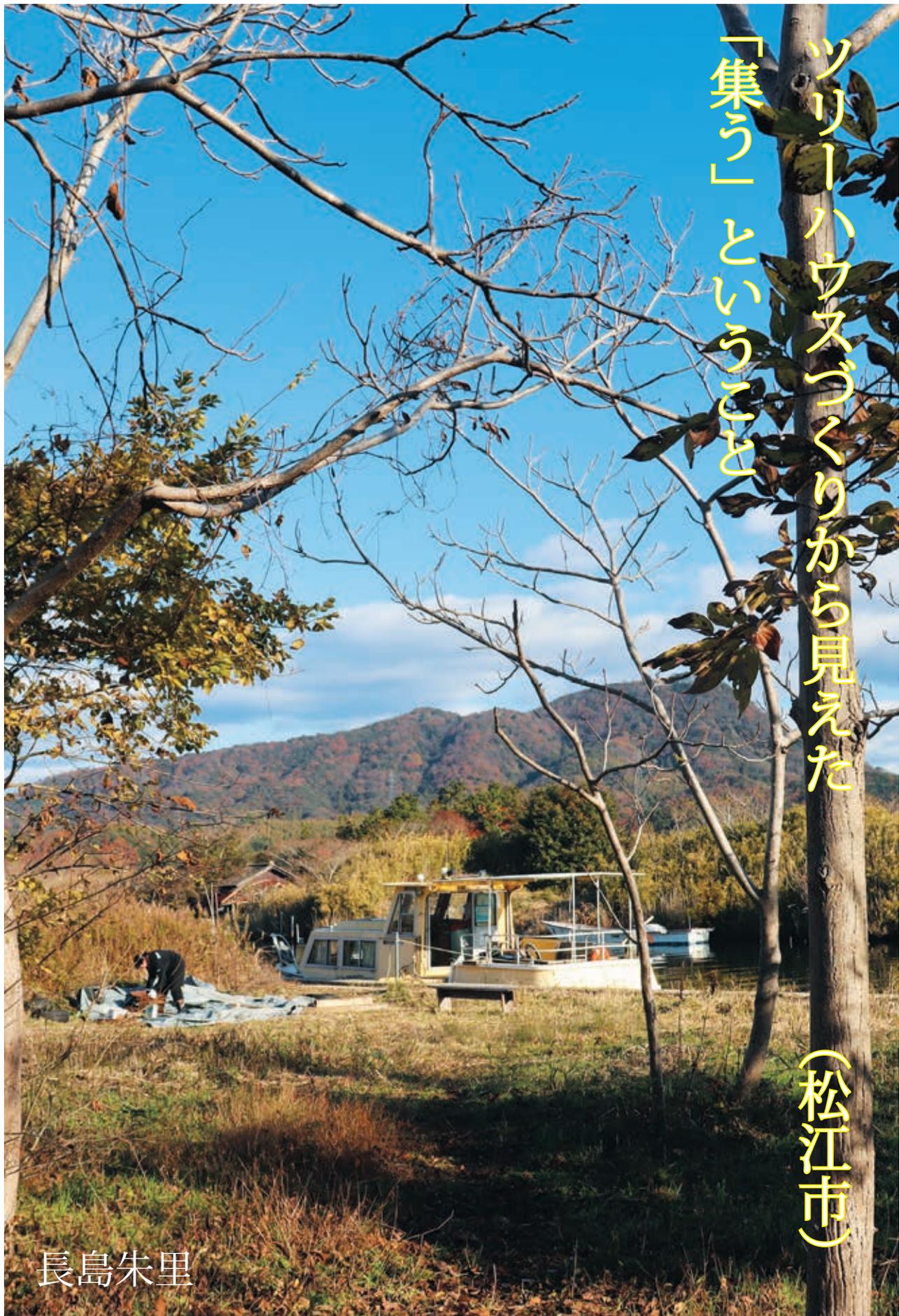
**取材を終えて**

今回、サービスを山陰の若者を中心に発信している、SANINふらっとさんへ取材をさせていただきました。一つひとつの取り組みはささやかなものかもしれないませんが、実際にSANINふらっとが主催するイベントに参加し、楽しんでいる参加者の様子を知ることができました。目には見えにくいサービスではありませんが、山陰や山陰の若者を活気づける場として、心強い存在です。SANINふらっとの宮崎さんは普段、松江駅から徒歩2分のビルの事務所で活動しておられます。5階・6階はgraphsの経営する宿泊施設「SEN」、3階にSANINふらっとの事務所、1階にはテナントとしてカレー専門店KARLYが入っています。ぜひ、足を運んでみてください。

(こんどう みりか)



KARLY 店内



「集う」ということ  
ツリーハウスづくりから見た

(松江市)

長島朱里



「無人島」と聞くと、人のいない場所を想像します。しかし、今回取材した島では、継続的に人が集い、活動が行われていました。本記事では、無人島での活動とツリーハウス制作への同行取材を通して、「集う」という行為がどのように生まれているかを考えていきます。今回は、大橋川にある無人の中州を舞台に活動する、吉川司さんと吉川佳奈美さんにお話をうかがいました。

## 島の活動が始まったきっかけ

島での活動は、当初から無人島を目指して始まったわけではなかったといえます。この地区には、嫁ヶ島へ渡る唯一の観光船である「矢田の渡し」があり、人力車を船に載せて島へ渡すという発想が活動の出発点でした。島の活動を始めたきっかけについて吉川さんに尋ねると、「そもそも無人島を目指していたわけではなかった」とおっしゃいました。

矢田渡船の関係者と交流を深める中で、「今いくつかの活動をしているが、担い手が足りず困っている」という話を聞いたそうです。その中の一つが、現在の無人島だったとのこと。

地権者ともつながりができ、「好きに使っていい」と言われたことをきっかけに、「人が集まれる楽しい場所をつくれたら面白いのではないか」と島の開拓が始まったそうです。

「きっかけは人力車というか、矢田渡船さんの活動を応援する中で、できないことを僕らがやってみていく、そんな関係ですね」とおっしゃいました。

現在はデッキの整備が進み、今後はツリーハウスの設置も予定されています。この場所が少しずつ「人が集う場」へと形を変えていることがうかがえました。



## ツリーハウス制作への同行

現在、島では人が集う拠点の一つとしてツリーハウスの制作が進められています。

筆者はその制作に同行し、作業を手伝わせていただきました。制作当日は、木を切る作業から始まり、資材の運搬、設計の確認、組み立てへと工程が進んでいきます。作業には明確な役割分担があるわけではなく、誰かが作業をしていれば自然と別の人が加わり、状況に応じて役割が変化していく様子が印象的でした。





床作り



屋根作り



壁作り



完成したツリーハウス (吉川さん提供)

## 作業の中で生まれる「集い」

作業の合間には、皆で食事をとり、焼き芋を囲む時間がありました。特別なイベントが用意されているわけではありませんが、同じ目的のもとで身体を動かすことで、自然と会話が生まれていきます。島では「作業」と「生活」が切り離されておらず、共に過ごす時間そのものが人を集わせているように感じられました。無人島という不便な環境だからこそ、互いに助け合い、関係性が築かれていくのではないのでしょうか。



## 無人島が「集う場」になるということ

島の活動は、単に場所を整備することが目的ではありません。人が集い、何かを共につくる過程そのものが、島に意味を与えていると思えます。ツリーハウスは未完成であり、活動も発展途上にあります。しかし、人が関わり続けることで、かつて無人だった島は、少しずつ「人の気配が残る場所」へと変化していました。

## おわりに

今回の取材を通して、「集う」とは、人が集まる結果ではなく、共に時間を過ごし、身体を動かす過程そのものなのだと感じました。無人島という何もない場所だからこそ、人と人との関係が際立ち、新たな集いの形が生まれているのが見て取れました。

(ながしま あかり)

# 人と人がつながる場所

(松江市)

永田友香

筆者は、地元である「かぶえかなちゃん家」を訪ねました。そこは夫婦でカフェ、人力車を営む無人島の活動をしておられる方のお家です。夫の吉川司さん、妻の吉川佳奈美さんとお話を伺いました。



## 「カフェと人力車を始めた年数は？」

人力車は令和5年。2026年3月から3年目になります。カフェが同年の12月です。

## 「人力車を始めたのは？」

人力車はね、まず僕が高校卒業後20年間松江の企業で働いてました。20年の節目の時に、そこしか知らないのが寂しかったのと、夫婦でできる何かがあったなという思いから、会社辞める決意しました。何しようかなって、次の職を探そうと思ったの。そしたら広島島の宮島で人力車に出会ったんだよね。僕たち人力車高いもんだってわかってたから、乗らないと思っただけで、子供たちがどうしても乗りたいってなっちゃって、子供たちを乗せてあげて、僕たちはホテルで待ってました。すると、もう子供たちキヤッキヤいながら戻ってくるわけよ。引張ってるのが女性の車夫さんで。宮島の坂ですごくきついからね。そこで苦しい顔一つせずすごいニコニコしながら上がってきたの。なんだこの人はと思っただけでこの仕事してるんですか」って聞いたの。すると、「こんなに素敵な仕事ないですよ」って言われたの。

「自分が勉強したりとか、体力作りしたりとかで頑張ったことに、ダイレクトでありがとう言ってもらえる仕事ないですよ。私にとつて天職です」って。それ聞いてすげえなと思っただけで、自分が乗らなかつたことを後悔したのよ。松江に帰ってきたら乗ろうと思っただけよ。そうしたら松江、城下町なのに人力車なくて、じゃあやっちゃおうかっていうのがきっかけです。誰もやってないならって奥さんも言ったしね。調べたら、その10年前に人力車についてのブログが残ってたそれが原田仏具店の人だった。そこで、原田仏具店に電話して、もしかして原田仏具店さんが人力車の手に入れ方知ってるかもと思っただけで話したんです。結局わからなかつたんだけど、社長さんから応援してますって言われてね。

それで、人力車が手に入らんことには始まらないの。「未来創造会議」っていう松江市の夢を持っている人たちが集まって、それを応援し合うコミュニティがあるんだけど、そこに入っただけで、

ここで発表するんですよ。1人ずつ自分の夢とか、これからの展望みたいなことを。松江市長もそこに来ていて、その前で話をしたんです。発表の中に、カフェがやりたいとかいろいろやりたいことの中の一つに、この人力車っていうのを入

**紹介します (松江城大手前出発)**

- 四景園コース** (約15分) 一人1000円・若二人5000円
- おれい! 盛りおれしコース** (約15分) 一人1000円・若二人5000円
- 塩見橋・岡山稲荷コース** (約45分) 一人7000円・若二人9000円
- ルート有明寺から口黒橋コース** (約45分) 一人7000円・若二人9000円
- 塩見! 塩見橋から口黒橋コース** (約90分) 一人13000円・若二人15000円

山城の二の丸までコース、観光の体感したい人にオススメのコース  
人力車を体験してみたい人へオススメのコース  
山城の歴史ある城下町を回り一歩おススメのコース  
ロマンチックな夜景を楽しみながらハートを揺らすコース、カップルやお子様にもオススメ  
人力車まつりを堪能したい方へおすすめコース



ていうのも、市長の中で松江市にあるといいなっていうなんかふわっとした構想があったのかわからんけど、とにかくなんか人力車にこう食いついてきてくださって。やりたいけど、まだできてないって話しました。その日の夜か次の日に、未来創造会議の主催の事務局の人から連絡があって、「人力車が手に入りますけど、どうしますか」って言われて。え!

れてて、そこに結構市長が食いついてくれました。ちょうど松江市としても、観光の水上交通だったり、陸の交通も充実させたいみたいなのがあって、人力車つ

と思つて欲しいですつて言いました。どこにあったかというところ、グリーンズベイビーっていうお店の店主さんがその10年前に使つてた人力車をいゝんなルートを通じて保管して下さつて、お店にそんなこと私たち知らないじゃないですか。しかも未来創造会議の最後の発表をしたところが、グリーンズベイビーだったんですよ。そのグリーンズベイビーで、人力車欲しくてと発表もして、たまたま繋がりに、多分そのグリーンズベイビーの店主さんがうちに人力車あるけどみたいな話になつたんでしょね。後から事務局からグリーンズベイビーの方が人力車譲つてもいいつて言っているけどどうするみたいな。そんな話ある？ ただで譲つていただいて。なかなかない奇跡で。きっかけは、その未来創造会議つていうのに、彼女（妻の佳奈美さん）が参加していただつてというのが一番大きくてね。口に出してると誰かが拾つてくれて、誰かが繋いでくれて。思っていることつて口に出した方がいゝつていうのは、やつぱその時にあのお話感したよね。私もその人力車をやりたいつていうことを、発表の中に入れてか入れないか迷つたんですよ。しかも入れたけど、結局は本当に最後の1行に人力車もやりたいんですよ。それだけの声を出したことで、こうやつて今に繋がつてる。多分ここで人力車を手に入れたら、今頃やつてないかもしれない。未来創造会議つていう場所にいたら人力車も手に入った。それつてやつぱり人と出会つたからなんですよ。ずっと一人で人力車つて考えてても何も進んでなかつたと思うんだけど、やつぱり誰かと会う、その自分の中の思いを人に話す。でも夢を語るのつて恥ずかしいじゃないですか人力車やるとかさ。それを踏み出した結果ですよ。

## 「かふえかなちゃん家を始めたの？」

多分自分の中にやりたいこととか夢とかがあつても、それを言葉に出すつていうのつてみんな恥ずかしくて言えないことつてあると思うんだけど、そういうのを吐き出せる場所とか人が繋がれる場所みたいなのが作りたかつた。カフェはカフェなんだけど、そういう場所にもなつたらいいなつていう思いもあつて、人が繋がる場所。そこからカフェを始めたつていうのはあるかな。もちろんパンを作つたり、コーヒー出したり、そういう人に食べてもらつて、嬉しいとか美味しい幸せに繋がるのも目的だったんだけど、ここで誰かと誰かが繋がる場所になるというのつていうのは根底にあつたから。誰かが、どつかでなんかチャレンジしたいけど、そのチャレンジする場所がわからないみたいな人がここ使つて少しチャレンジができたらなつていうのが。赤ちゃんの歯磨き教室が行われたりとか、楽健法つていうお互いの体踏み合ふみたいな健康法があるらしいんだけど、それをここでやつてみたりとか。看取り師さんつていう、人が亡くなるのを看取る仕事があるんだけど、その人たちが話す場所として提供してあげたりとか。そんな感じ、ここを使つて何かが



できるんだつたら、場所として提供してあげたいなつて。カフェだけじゃない。人が集まる場所、あとは子供食堂やつてみたりとか夏休みに宿題ここでやるみたいな。寺小屋やつてみたりとか今とにか何かができる場所にはしたいなと思つています。

ただし、のんびりやる感じですよ。日にもよるけど、そんなに満員になつて忙しいつてことはないかな。それが逆に



と思つて欲しいですつて言いました。どこにあったかというところ、グリーンズベイビーっていうお店の店主さんがその10年前に使つてた人力車をいゝんなルートを通じて保管して下さつて、お店にそんなこと私たち知らないじゃないですか。しかも未来創造会議の最後の発表をしたところが、グリーンズベイビーだったんですよ。そのグリーンズベイビーで、人力車欲しくてと発表もして、たまたま繋がりに、多分そのグリーンズベイビーの店主さんがうちに人力車あるけどみたいな話になつたんでしょね。後から事務局からグリーンズベイビーの方が人力車譲つてもいいつて言っているけどどうするみたいな。そんな話ある？ ただで譲つていただいて。なかなかない奇跡で。きっかけは、その未来創造会議つていうのに、彼女（妻の佳奈美さん）が参加していただつてというのが一番大きくてね。口に出してると誰かが拾つてくれて、誰かが繋いでくれて。思っていることつて口に出した方がいゝつていうのは、やつぱその時にあのお話感したよね。私もその人力車をやりたいつていうことを、発表の中に入れてか入れないか迷つたんですよ。しかも入れたけど、結局は本当に最後の1行に人力車もやりたいんですよ。それだけの声を出したことで、こうやつて今に繋が

ちようどいいよね。

## 「実際にお客さんから言われて嬉しいんだよ〜」 (人力車)

ふるさと納税で、1日城主というのを松江市が出してるんです。それに來てくれた女の子が人力車が楽しすぎて、それ以外でこつちに來た時にも必ず指名してくれるようになってます。東京の方なんですけど、今小学校1年生かな。その時は年長か。その子はね、とにかく人力車が楽しいって言ってくれるあの笑顔がたまらない。

僕は最大限努力してるし頑張ってるんで、僕の努力や頑張りが今の人力車の値段に反映するんだけど、乗ってくれた



お客さんがそれ以上にチップ払ってくれたりした時には、自分が頑張ったことがこの人に幸せを与えていることができたんだってことが、そういう形で返ってくるっていうのもやっぱり嬉しい。僕はこの金額で満足っていう金額つけてるのに、それ以上の満足がこの人にはあったんだっていう。言われたことっていうと「松江が好きになった」って言うてくれた時は嬉しかったかな。

(かふえかなちゃん家)

やっぱり食パンを自家製で作ってるんですけど、その食パンが美味しいうって言うて食パンを目当てにカフェに通ってくれるお客さんが増えたことも嬉しいし、ここでのんびりしてパワーアップしたみたいな癒されたみたいな、そう言うてくださるのも嬉しいですね。喜んでもらえるのが一番嬉しいよね。



## あわりじ

人とのつながりを大事にし、支えあい同じ方向に向かつて地域や人に喜びを届けているご夫婦だとインタビューを通して思いました。まさに地域に温かい集いの場を作ってくださいる方たちでした。ご夫婦の活動から、ただ人が集まることだけではなくそれぞれの思いを共有したり、支えあったりすることで夢が現実的になっていけると感じます。何かに挑戦しようと思つた時、まず人との出会いから始まって、人とのつながることで輪が広がっていくのではないのでしょうか。

(ながた ゆうか)



つどつた場所を語る  
(松江市)

松江市立白潟小学校跡

山根繁樹

(取材)

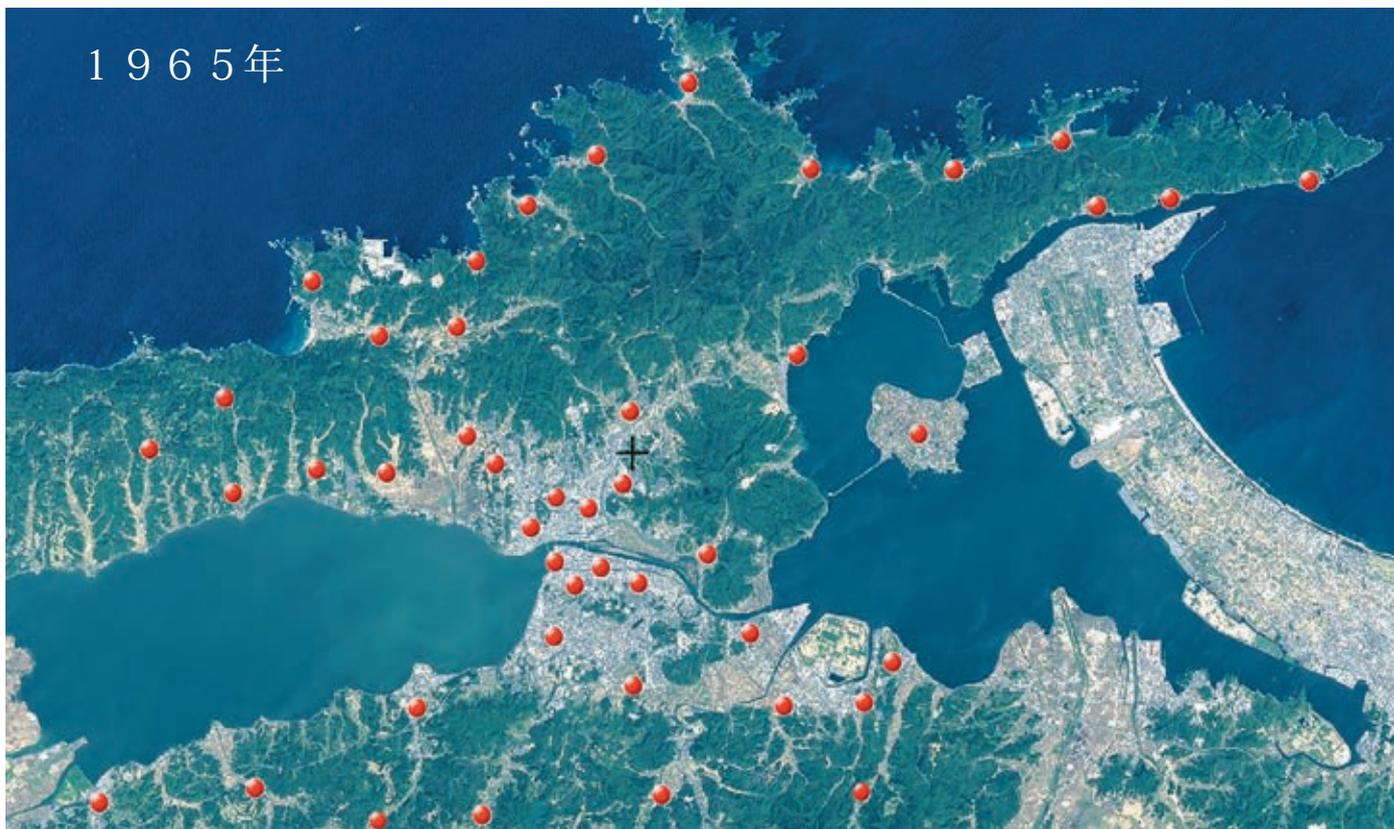
近藤美里花

岩崎仁美

島根県でも人口減少は続いています。県全体では64万人を下回りました。今から60年前、1965年で見ると、島根県の人口は90万人を少し割り込むぐらいでした。単純に考えると、1年でおよそ4300人ずつ減っている計算になります。死亡者数が出生者数を上回る「自然減」が大きな要因で、子どもの数が減ってきているのです。

当たり前なのですが、子どもの数が減ることにより、小学校の児童数も減っていきます。そこで起こるのは、学校の統廃合です。県庁所在地の松江市(旧八束郡含む)でも、小学校の数は減少しています。子どもたちが「つどつ」場である小学校。統廃合で廃校となった小学校に通っていた、卒業生のお話をうかがいました。

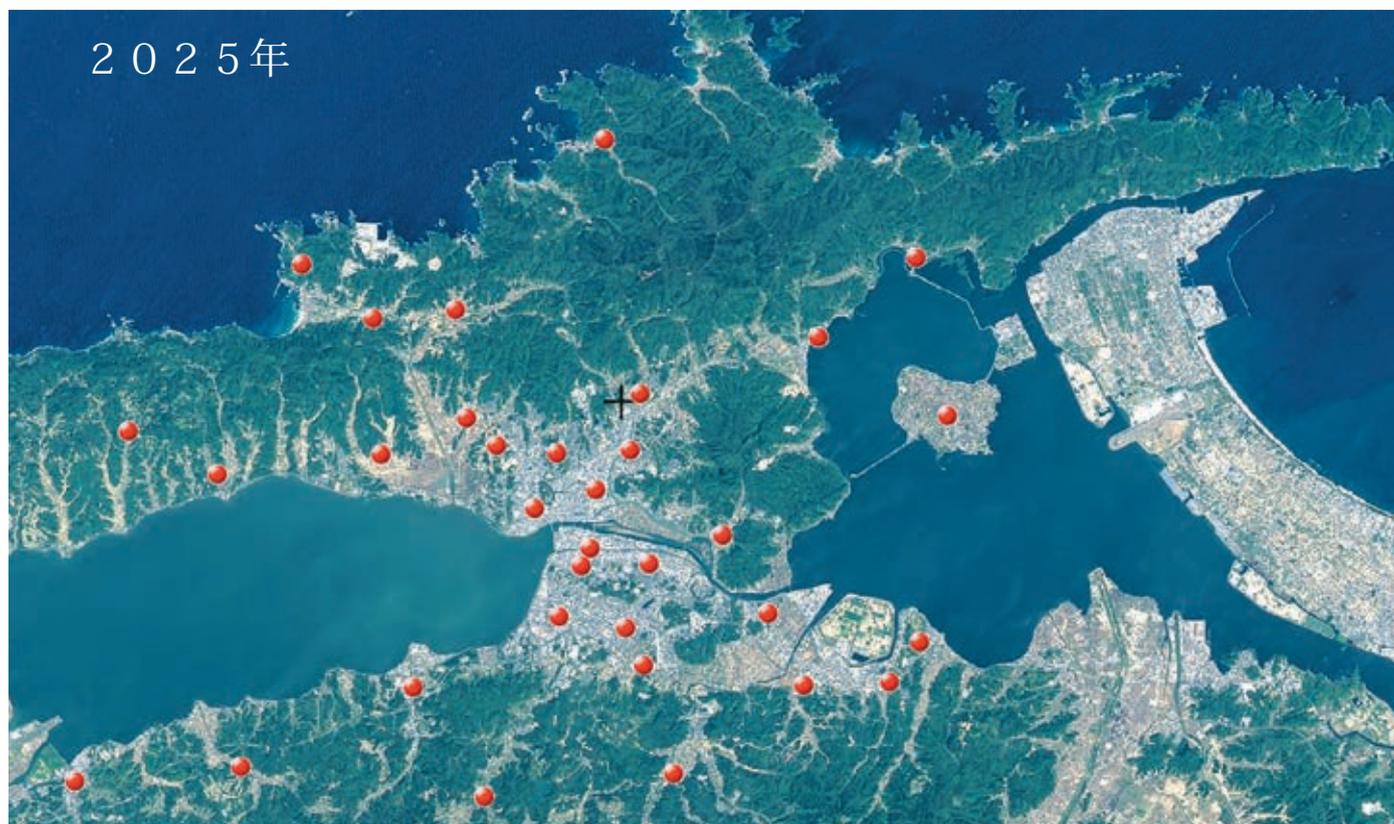
1965年



小学校の所在地

- ・上下段とも、地理院タイル（2025年時点の全国最新写真（シームレス））を加工して作成した。
- ・上段は、1965年時点の旧松江市内及び旧八束郡内の小学校（島根大学付属および分校除く）のおよその位置を示したものの。
- ・下段は、2025年の松江市内の小学校（島根大学付属および分校除く）のおよその位置を示したものの。

2025年



## 松江市内小学校の減少

1965年、旧八束郡にあった町村（鹿島町・島根町・美保関町・八束町・東出雲町・八雲村・玉湯町・宍道町）と旧松江市にあった小学校（島根大学付属および分校のぞく）は、合わせて45校でした。ただし、直前の1964年には八雲村にあった岩坂小学校、岩坂小学校平原分校、熊野小学校が八雲小学校に統合されたり、1969年には北堀小学校と法吉小学校が新設の城北小学校へ統合（後に法吉小学校は再開校）されたりしていますし、後に古志原小学校が開校したりしていますので、数字は変化の一断面にすぎません。

そして、2025年現在、松江市内の小学校（島根大学付属および分校除き義務教育学校含む）は33校です。この60年で10校以上が廃校になったことになりました。また、2022年時点での児童数の合計は、10548人となっています。1965年時点での旧八束郡の児童数の記録がなく、旧松江市にあった23校のみの児童数を合計すると、9317人でした。比較が難しいですが、1校あたりの児童数にしてみると、1965年時点ではおよそ400人、2022年時点ではおよそ320人となり、学校の数が減る

とともに1校あたりの児童数も減少傾向にあることがわかります。

## 白瀧小学校

戦前から、現在のNHK松江放送局あたり（灘町）に、白瀧小学校がありました。当時は木造校舎だったようです。そして、1961年の袖師干拓によってできた土地に、翌1962年11月に移転します。現在、島根県立美術館がある場所です。校舎は鉄筋コンクリート3階建てでした。市民プールや市立体育館もあり、白瀧小学校の児童は市立体育館を使っていたそうです。

1995年、白瀧小学校は朝日小学校と統合して中央小学校となりました。もともと朝日小学校は、白瀧小学校の校区を分割する形で、1938年に開校していました。白瀧小学校から分かれた朝日小学校でしたが、校区は再び統合され、白瀧小学校と朝日小学校は姿を消すことになりました。



袖師にあった白瀧小学校

出典：地理院タイル年度別写真（1974年～1978年）

## 白潟小学校卒業生インタビュー

白潟小学校卒業生のお二人、川村浩一さん（1976年3月卒業）と長瀬睦恵さん（1978年3月卒業）に、白潟小学校の思い出をうかがいました。

——白潟小学校でどんな遊びをしていましたか？

川村浩一さん（以下、川村） 僕らはマルカケって……

長瀬睦恵さん（以下、長瀬） 足で丸描いて。

川村 そうそう。今あるのかな？

長瀬 私たちは藤棚の下でやってました。校庭には、今なら絶対ダメなやつで、回旋塔っていう遊具もありました。

川村 あったなあ。傘みたいな形でグルグル回る。みんな掴んで走って遠心力で足が浮く。

長瀬 給食室の隣が図工室でしたよね。音楽室もあった。そこが別棟で平屋だったので、庭球を投げ上げて「テンカ」してました。

川村 やつとつたねえ。

長瀬 5・6年生の時は教室で馬跳びやってました。女子だけで。あのときガラスが割れたんじゃないかな。それと、屋上でゴム跳び。5・6年生の時自



長瀬さん（左）と川村さん

転車部ができて、屋上に競技用のコースが描かれてました。

——ああ、「交通安全」ことも自転車大会で用ですね。

長瀬 そうです。

川村 宍道湖との間が細い岸公園で、冬に雪が降ると大きな雪だるまを作って宍道湖に落としてましたね。

長瀬 宍道湖といえば、白潟幼稚園の時に宍道湖で亡くなった子がいて、「宍道湖には絶対入ってはけません」って言われてました。水には入らなかったけど、如泥石の上は跳んで遊んでました。それから、体育館の前に大小の小山があつて、

一本橋が渡してあつた。そこで何度も転んで、そのたびに保健室で赤チン塗ってもらってました。

川村 僕はその山でソリ遊びをしましたね。

長瀬 冬に？

川村 いえいえ、ランドセルで。

——それは怒られるやつですね。小学校の行事で覚えているものはありますか？  
長瀬 朝行くと、校庭を走らなきゃいけなかった。毎日。何周走ったか記録していつて、宍道湖一周の距離を指してたんじゃなかったかな。それから、5年生の時、月遅れの8月の七夕の頃に、「白



潟子ども祭り」をやるって言われて、体育の時間に豆絞りをしながら踊りの練習をさせられて。最初の年は雨が降ったので、体育館で大きな笹を飾って子どもたちが浴衣や法被を着て踊りました。6年生の時は晴れたので、岸公園なんかも使いながら、大きなお祭りだった。夏休みだけど、出校日とは違って、夜集まるのが楽しかった。小学校主催のお祭りだとずっと思ってたけど、大人になって公民館に勤めはじめてから、主催が白潟教育会とか、青少年健全育成協議会、公民館とかで、小学校主催の行事じゃなかったってわかった。たぶん、同級生はみんな知らないと思う。

川村 僕、児童会長だったんですけど、児童会で茶がらを集めて、代表として意東小学校に持って行きました。

長瀬 私も児童会長の時に持って行きました。白鳥用でしたよね。「乾燥させてから持ってきて、黴が生えるから」って言われてましたね。先生に車で連れて行ってもらった。

——お二人とも児童会長だったんですね。

長瀬 会長は前期と後期で分かれて務めるんですけど、前期の目次純子さんが初の女子会長で、私が後期に勤めたので、女子が続きました。たぶんそれまでって、学級委員決めるにしても男子が委員長で

女子が副委員長、みたいな感じだったんですよね。

川村 今、県立美術館の自転車小屋のところにある、100周年記念に置かれた石には、みんな座ったことがあると思う。

長瀬 ウサギ小屋とか、鶏小屋とかあって、動物もいろいろいましたよね。

川村 飼育係になったとき、ウサギがイタチに食べられて、小屋に入ったら皮だけになってた。

長瀬 ひー。そういえば、放送委員会で昼休みにテレビ放送してましたよね。ちゃんとしたスタジオがあったって、

川村 僕、一回出たんですよ。特技を披露するっていうんで、僕耳が動くんですね。で、耳をアップにしてもらって動かせた。

長瀬 私それ見たかも。2つ下だから絶対見てる。

——建物の思い出は？

長瀬 体育館が市の体育館だったんですよ。だから、校章じゃなくて市のマークが入ってた。でもそんなこと知らないから、当時トイレが汲み取り式で、汲み取ってほしいときには三角形の青い旗を立ててた。その旗に市のマークが入ってたんだけど、それと同じマークが体育館にあるのはなんで？ と思ってました。

——それはたしかに不思議に思いますよね。

ね。母校がなくなると聞いたときは？

長瀬 直前。もう閉校になるから同窓会します、って案内が。同窓会した後、学校行って、スリッパ履いてバスケットした。勝手に入ったのか、許可とって入ったのかわからないんだけど。休みの日だから誰もいなくて、理科室とか、学校の中を回って。そう、ダストシュートとか、給食用のエレベーターだとか。昇降口で「ちっちゃいね」って。「なくなるんだね」って、最後。

川村 僕はその頃広島にいたので、でも、連絡が、親からきたのかもしれない。まあ、それは寂しいものですよ。

長瀬 でも、なくなっただけで、その白濁小学校跡地が県立美術館になるっていうのが嬉しくて。小学校は、やっぱり今でも、懐かしい。

川村 「ここにあったんだよ」みたいな話を、知らない人にもできるしね。

長瀬 たまたま県営住宅に住んでいたの、壊されていくのを毎日見守ってました。

川村 なんで減っていくんだろう。だって中心部じゃないですか。

長瀬 ドーナツ化現象……。一番最後107期の卒業生が最後になった。なんか、しょうがないよねって感じ。朝日小の人たちも同じような感じだと思う。そういえば、この前境港の雑貨屋さ

んに行ったら、白濁小の文鎮が置いてあって。

川村 そうそう。なんか、「うちにもあります」って。

長瀬 開校百年記念の文鎮。お店の人に聞いたら、なんか、おじいさんが持ってたとか何とか。いやいやこんなところでこれに出会うんだ、と思ってる。

川村 卒業生は、いろんなところにいるでしょうからね。

長瀬 5・6年生になると部活があつて、部活終わりに体育館から夕陽が沈むのがきれいに見えた。そんなことも覚えてますね。

おわりに

少子化は進み、学校の統廃合も進みます。母校の名前が残っていないというのは、過ごした校舎が建て替えられたというのとは違う感慨を生むということがよくわかります。今回お話をうかがったお二人に限らず、つどった母校の存在がなくなっただけは、それぞれがそれぞれ個別の思い出を抱えていることだと思います。ときには、そんな仲間が「つどい」、それぞれの思い出を披露し合うことで、「つどい」場としての学校をそこによみがえらせてみてはいかがでしょうか。

(やまねしげき 文化情報学科教員)



# 編集後記

☆記念すべき第7号は「つどう」というテーマで記事を書かせていただきました。SANNINふらっとでは若者の居場所づくりが印象的で、宮崎さんのUターン経験が活かされていると感じました。今後もバイタリティーを持ち進んでいただきたいと思います。キヨールの金乗さんや福頼さんとは以前から交流がありました。キヨール誕生の経緯など詳しいお話をお伺いするのは初めてでした。お二人のアイリッシュ音楽との向き合い方には思い入れの深いものがあり、心に響きました。文化情報誌製作の活動は忙しいものですが、同時にとても有意義な経験となりました。制作に関わったすべての方々に、心より感謝申し上げます。(近)

☆今回の制作では、無人島での活動と神楽という、一見異なる二つのテーマを通して、人と地域との関わりについて考える機会となりました。実際に取材を行い、お話を伺う中で、どちらにも共通して「人が集い、受け継ぎ、支えていくこと」の大切さがあると感じました。無人島での活動には、新たな価値を生み出すという挑戦があり、神楽には長

い時間をかけて守られてきた地域の誇りがありました。現場に足を運び、言葉と紙を交わすことで、資料だけでは分からない思いや空気に触れることができました。大きな学びとなりました。お忙しい中、取材にご協力いただいた皆さまありがとうございます。(朱)

☆高校生の時から興味を持っていた「ひだまりのおと」制作で、アポを取ることやレイアウトなど貴重な経験をする事が出来ました。

「つどう」をテーマにして取材を進める中で、人が集まるということには場所だけでなく、個人の気持ちやその瞬間の時間を共有することに意味があるのだと感じました。何気ない会話や小さな繋がりが地域の雰囲気を作り上げていると思えました。お忙しい中、取材にご協力していただいた方々ありがとうございます。(友)

☆自分でインタビューを行い、写真を撮影し、記事にするというなかなか経験できない経験をさせていただきました。元々「行きたいけどなあ」という気持ちだった岩美町へ、明確な目的をもって訪れるきっかけにもなりました。実際に足を運んでみると、気持ちのよい景色が広がっており、本当に訪れてみて良かった

です。作業の過程では難しいことも多くありましたが、完成した際には大きな達成感を得ることができ、この授業を履修してよかったですと感じています。(真)

☆巻頭言には、今年度、山村仁朗先生の授業「日本の言語と文化I」で落語の台本作りのご指導をいただいた、落語愛好家の浪花亭福助さんにご寄稿いただきました。「ブンジョウ寄席」で披露された。話題を集めた授業でした。福助さん、ありがとうございます。

さて、この「文化情報誌制作」の授業、今年度は例年に比べて履修者が少なく、ヒヤヒヤしましたが、一人で複数の記事を担当してもらい、さまざまな記事を掲載することができました。しかし、一人の負担が多くなった分、題材探しに手間取ったり、取材のアポイントメントが取れなかったり、取材に同行できる助っ人が手配できなかったりと、それぞれ苦労があったようです。また、どうしても近

場での取材が増え、

取材地のほとんどが松江市内という結果になってしまいました。とはいえ、アイリッシュ音楽、まちの駅、神能、聖地巡礼、カフェ、人力車、無人島でのツリーハウス作り、小学校の統廃合などと、「つ

どう」をテーマに多様な内容になりました。お忙しいなか、学生の取材に応じてくださった皆さま、誠にありがとうございます。

「つどう」というテーマに決まったら、きには想像していなかった取材先、内容が多くありました。お読みいただく皆さまも、『ひだまりのおと』第7号の記事のどれかをきっかけに、「つどう」機会をお持ちいただけると幸いです。(繁)

## ひだまりのおと 第7号

2026年3月20日発行

編集 『ひだまりのおと』編集部

責任者 山根繁樹

E-mail: s-yamane@u-shimane.ac.jp

発行 島根県立大学短期大学部

文化情報学科

〒690-0044

島根県松江市浜乃木7丁目24-2

TEL. 0852-26-5525 (代表)

FAX. 0852-21-8150

印刷 有限会社高浜印刷

制作指導 小倉佳代子 日高正樹 山根繁樹



松江市 東出雲まちの駅女寅